

서시

죽는 날까지 하늘을 우러러
한점 부끄럼이 없기를,
일새에 이는 바람에도
나는 괴로워했다.
별을 노래하는 마음으로
모든 죽어가는 것을 사랑해야지
그리고 나한테 주어진 길을
걸어가야겠다.

오늘밤에도 별이 바람에 스치운다.

序詩

1941.11.20

死ぬ日まで天を仰ぎ
一点の恥なきことを、
木の葉に起こる風にも
わたしは苦しんだ。
星をうたう心で
すべての死んでゆくものを愛さなければ
そしてわたしに与えられた道を
歩みゆかねば。

今夜も 星が 風にさらされる。

(これは延禧専門学校時代のもの)

흰 그림자

황혼이 짙어지는 길모퉁에서
하로종일 시들은 귀를 가만히 기울이면
땅검의 옮겨지는 발자취소리、

발자취소리를 들을 수 있도록
나는 총명했든가요。

이제 어리석게도 모든 것을 깨달은 다음
오래 마음 깊은 속에
피로워하든 수많은 나를
하나、둘 제 고향으로 돌려 보내면
거리 모퉁이 어둠 속으로
소리 없이 사라지는 흰 그림자、

흰 그림자들
연연히 사랑하든 흰 그림자들、

내 모든 것을 돌려보낸 뒤
허전히 뒷골목을 돌아
황혼처럼 물드는 내 방으로 돌아오면

신념이 깊은 으젓한 양처럼
하로종일 시름없이 풀포기나 뜯자。

白い影

1942.4.14

黄昏が濃くなってゆく街角で
一日中 疲れた耳を 静かに傾ければ
夕闇の 移される 足跡の音、

足跡の音を聴くことができるように
わたしは聡明だったのでしょうか。

いま 愚かにもすべてのことを悟った次に
長く心の奥深くに
苦しんでいた多くのわたしを
ひとつ、ふたつ、そのふるさとへ送り返せば
街角の闇の中へ
音もなく消えゆく白い影、

白い影たち
ずっと愛していた白い影たち、

わたしのすべてのものを送り返した後
うつろに裏通りをまわり
黄昏のように染まるわたしの部屋へ帰ってくれば

信念の深い堂々たる羊のように
一日中憂いなく草でもはもう。

흐르는 거리

으스럼히 안개가 흐른다. 거리가 흘러간다.
저 전차, 자동차, 모든 바퀴가 어디로 흘러워가는
것일까? 정박할 아무 항구도 없이, 가련한 많은
사람들을 싣고서, 안개 속에 잠긴 거리는,

거리모퉁이 붉은 포스트상자를 붙잡고, 섰을라면 모든
것이 흐르는 속에 어렴풋이 빛나는 가로등, 꺼지지
않는 것은 무슨 상징일까? 사랑하는 동무 박이여!
그리고 김이여! 자네들은 지금 어디 있는가? 끝없이
안개가 흐르는데,

「새로운 날 아침 우리 다시 정답게 손목을 잡아 보세」
몇 자 적어 포스트 속에 떨어트리고, 밤을 새워
기다리면 금휘장에 금단추를 빼었고 거인처럼 찬란히
나타나는 배달부, 아침과 함께 즐거운 내림,

이 밤을 하염없이 안개가 흐른다.

流れる街

1942.5.12

おぼろに霧が流れる。街が流れてゆく。

あの電車、自動車、すべての車輪はどこへ流されてゆくのだろうか？ 停
泊する決まった港もなく、憐れな多くの人々を乗せて、霧の中に閉ざされ
た街は、

街角の赤いポストをつかんで、立っていると、すべてのものが流れるなか
に ぼんやり光る街灯、消えないのは何の象徴か？ 愛する友 朴よ！
そして金よ！ 君たちは今どこにいるのか？ 果てしなく霧が流れている
が、

「新しい日の朝、ぼくたちはもう一度親しく手を取り合おう」何字か書い
てポストの中に落として、夜を明かして待てば、金の徽章に金ボタンを光
らせて巨人のように燦然と現れる配達夫、朝とともにうれしい来臨、

この夜を とめどなく霧が流れる。

사랑스런追憶

봄이 오든 아침、서울 어느쪼그만 停車場에서
希望과 사랑처럼 汽車를 기다려、

나는 플랫폼에 간신히 그림자를 터트리고、
담배를 피웠다。

내 그림자는 담배연기 그림자를 날리고、
비둘기 한떼가 부끄러울것도 없이
나래속을 속、속、햇빛에빛워、날었다。

汽車는 아무 새로운 소식도 없이
나를 멀리 실어 다 주어、

봄은 다가고 — 東京郊外 어느 조용한 下宿房에서、
옛거리에 남은 나를 希望과 사랑처럼 그리워한다。

오늘도 汽車는 몇번이나 無意味하게 지나가고、

오늘도 나는 누구를 기다려 停車場가차운
언덕에서 서성거릴게다。

— 아아 젊음은 오래 거기 남아있거라。

이토しい追憶

1942.5.13

春が来ていた朝、ソウルのある小さな停車場で
希望と愛のように汽車を待ち、

わたしはプラットホームにつらい影を落として
たばこを吸った。

わたしの影はたばこの煙の影を飛ばし、
鳩の一群れが恥じることもなく
翼の中をすみずみまで日の光に照らされて、飛んだ。

汽車はなんの新しい消息もなく
わたしを遠く乗せていってくれて、

春は行ってしまい — 東京郊外のある静かな下宿部屋で、
昔の街に残ったわたしを 希望と愛のようになつかしむ。

今日も汽車は何度も無意味に通り過ぎ、

今日もわたしはだれかを待って 停車場近くの
丘で 行ったり来たりするだろう。

— ああ 若さは長くそこに残っていてくれ。

쉽게 씌어진 시

창밖에 밤비가 속살거려
육첩방은 남의 나라,

시인이란 슬픈 천명인 줄 알면서도
한 줄 시를 적어 볼까.

땀내와 사랑내 포근히 품긴
보내주신 학비 봉투를 받아

대학 노트를 끼고
늙은 교수의 강의 들으러 간다.

생각해 보면 어린때 동무를
하나, 둘, 죄다 잃어 버리고

나는 무얼 바라
나는 다만, 홀로 침전하는 것일까?

인생은 살기 어렵다는데

たやすく書かれた詩

1942.6.3

窓の外に 夜の雨がささやいて
六畳の部屋は ひとの国、

詩人とは 悲しい天命だと知りつつも
一行 詩を書いてみるか、

汗のにおいと愛のにおいに ほんのりと包まれた
送ってくださった学費封筒を受け取り

大学ノートを脇に抱えて
老いた教授の講義を聞きに行く。

思ってみれば 幼いときの友を
ひとり、ふたり、みな 失ってしまい

わたしは何を願って
わたしはただ、ひとり沈むのか?

人生は生きがたいというのに

시가 이렇게 쉽게 씌어지는 것은
부끄러운 일이다.

육첩방은 남의 나라
창 밖에 밤비가 속살거리는데,

등불을 밝혀 어둠을 조금 내몰고,
시대처럼 올 아침을 기다리는 최후의 나,

나는 나에게 작은 손을 내밀어
눈물과 위안으로 잡는 최초의 악수.

詩がこのようにたやすく書けるのは
恥ずかしいことだ。

六畳の部屋は ひとの国、
窓の外に 夜の雨がささやいているが、

灯火をともして 闇を少し追いやり、
時代のように来る朝を待つ 最後のわたし、

わたしはわたしに 小さな手を差し出して
涙と慰めで握る 最初の握手。

봄

봄이 血管 속에 시내처럼 흘러
돌, 돌, 시내 가차운 언덕에
개나리, 진달래, 노 — 란 배추꽃,

三冬을 참어온 나는
풀포기처럼 피어난다。

즐거운 종달새야
어느 이랑에서나 즐거웁게 솟쳐라。

푸르른 하늘은
아른, 아른, 높기도 한데……

春

春が 血管の中に 小川のように流れ
とく、とく、小川の近くの丘に
れんぎょう、つつじ、黄色—い白菜の花、

三冬を耐えてきたわたしは
草のように萌え出る。

楽しいひばりよ
どの畝からでも楽しく舞い上がれ。

青—い天は
ゆら、ゆら、と高いのだが……

(1942.6 推定)